

「イエスは振り向いてペトロに言われた」(23)「ペトロを叱って言われた」(マルコ 8:33)

- 1、 この聖書の箇所「受難予告」は、昔から受難節に読まれてきたテキストです。今日はマタイを読みました。元来はマルコが原典です。この「受難予告」は福音書全体の「分水嶺」です。ガリラヤの伝道活動が終り、エルサレムを舞台とした受難劇が「始められ」(16:21)た、その境です。弟子たちの最初の「招き」から、新たな、再度の「招き」が始まるのです。その境の出来事に「ペトロが叱られる」物語がきます。マタイは紀元1世紀で「一番弟子ペトロをかばう教会の守りの姿勢」が見られます。「叱られる」を削除してしまいました。また、「邪魔する者」(23)を入れて「弟子の無理解」と言うマルコの基調を緩めます。また、招きからマルコの「群衆」を外し「弟子」のみにします。マルコでは群衆も招かれているのです。マタイはペトロを教会の中心人物としています(16:18)。
- 2、 21節の「必ず……することになっている」に注目ください。長老、祭司長、律法学者たちのあたかも神の代理人であるかの如き宗教的・政治的権威の「力」が破られるためには、僕の姿を取る一人の人の受難の死が、「必ず」必要だ、と言っています。「神の必然」です。「神の子羊」(ヨハネ1:29)、イエスの存在そのものの「逆説」の始まりなのです。(難波幸矢さんは人生で「私はあなたと結婚してよかった」と二度言います。二度目は死に向かう難病の夫絃一さんとの厳しい葛藤を経た後の逆説的告白でした。)
- 3、 弟子ペトロは弟子を代表してこの逆説を妨害するのです。「イエスをわきへお連れして、いさめ始めた」(22)。ペトロは長老たちの「力」の論理と同質なのです。長老、祭司長、律法学者のように、己を正統化して力で物事を突破するのは「サタンの力」の仕業です。サタンの力から自由になれと言うイエスの言葉がああ「叱責」です。
- 4、 「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。これは「自分の死に場所」から逃げてはならないことです。D. ボンヘッフアーは「イエスが人を招く時、彼はその人に来て死ぬことを命じる」と言っています。マルコは「わたしのため、また福音のため」とイエスと福音とを同列に並べます。マタイは「福音」を削除しました。マルコは「力によらない生き方」をより客観化しているのです。自分を捨てることは自分の力で出来ることではなく、自分が神のものであって、神が「自分を捨てること」の根源で働き給う事を信じることの中で起こる出来事です。「福音のため」とは「福音に依り頼んで」と言う事です。
- 5、 叱責は人格の全面否定ではありません。福音に依り頼まない生き方から、依り頼む生き方へと、引き込み、招く後押しです。自分にとって不都合な出来事に出合った時、それをどう受け取るかが大事です。そこにはきっと「自分本位を捨てること、責任への逃げを止めること」への神の促しが「叱責」として含意されています。